

討
論
(二)

(中野) 「戦後日本資本主義の『都市と農村』」は山田盛太郎さんの分析を説明されたのか。

(島崎) 区分や内容の整理の仕方は、山田先生の論文をかなりここでお借りしてきている。

(中野) 「第二階梯」で「一個の厩大を資本プロパー」とあるが、この場合の「一個の」とは「握りの」という意味か。

(島崎) 「一握りの」という意味ではなくて、資本にとっての労働力の供給基盤に農業がなってしまったということで、「一個の」というのはあまり考えなくてもよい。

(中野) それからもう一つ、「諏訪・松本新産都市調査」の「農村階級編成の変化」の中で「中農のうち富裕農」とあるが、この場合に「中農の上」という意味か。

(島崎) 階級区分の場合に、「中農」と「富農」の間に「富裕農」を別個に区分して出す場合もあると思うが、やはり私はいわゆる

「富裕農」というのは「中農」の中だろうと思う。それで、「中農の上層」みたいなことを一応考えれば、そう間違いはないと思う。

(中野) そうすると「農村企業者」との関連はどうなるのか。

(島崎) 「農村企業者」というのは、農業を兼ねていて、他に自営企業を恒常的な労働者を雇ってやっている人を、ここで「農村企業者」と言っている。

(中野) 要するに外から農業労働者を雇い入れて、いわゆる欧米式の農業経営……

(島崎) そうである。営業部門に人を雇い入れてやっている。

(高橋) 農業だけではなし。

(島崎) 農業にという意味ではなくて、営業部門に一般的にという意味である。で、一般の商業労働者の場合にはそういう雇用関係はない、農業を兼ねた自営業の場合である。それから「農村労働者」の規定に対していろいろ論議があるが、その辺は販売額と経営規模とを組合せて区分している。

(中野) さきほどの「諏訪・松本新産都市調査」の「農村階級編成の変化」で、これはいわゆる「上・中・下」という意味で分けられていると思うが、「富裕農」というと、やはり「農村企業者および富裕農」として「富裕農」は上に上げるべきではないか。

(島崎) やはり階級区分の基本的なのは「富農・中農・貧農」だろうと思うが、その場合に「富裕農」というものを別の一つ立てることはかなり問題があると思う、階級区分で。で、やはりあくまでもこれは「富農・中農・貧農」を基礎として、その「中農」の中の極く一部の上層部分、かなり大きな販売額をもって、通俗的に言えば黒字経営が維持されていて、しかし雇用関係は恒常的な労働者を一人雇うほどの雇用ではない、若干の日雇いや何かは雇うかもしれないけれども、そういうようなものを「富農」と言っているのは階級区分としては行き過ぎだろうと思う。それでまあ「中農」の範疇の中でいいだろうと思う。ただ、その場合に、やはり紛らわしい言葉を使わない方がいいと思う。であるが、一応分析のために上向・下向の状態を少し明瞭にさせるための一つのいわば苦肉の策として、こういう「富裕農」というような区分を一つ立ててみてもらう過ちではない。ただ「中農」とは区別された意味での範疇として「富裕農」を立てることは間違いだと思う。

(中野) そうすると、「農村企業者」と「富裕農」との格差というのは相当あるわけか。

(島崎) 「農村企業者」というのはまた全然違う。農業を兼ねている、例えば機屋さんをやっていたり、金属か何かの下請けなどを企業としてやっていたりして、しかも雇用者をその面でもっている人を「農村企業者」と言ったのである。

(中野) それはわかるが、いわゆる所得面で、農業所得だけではなくて農外所得も含めて、要するに所得の高によって「農村企業者」というのを上にもっていかれたのか。

(島崎) 所得も加わるが、やはり搾取関係が基礎になるのではな
いか。

(高橋) 戦前における山田さんの分析の結果から出てきたのは、「戦争」のような形で資本主義が破局の道を歩みたい形であるが、いざ、現在の問題になって、農業解体、まあどういいう危機を醸成するかわからないが、日本独占資本主義といふのはかなり強いものであって、戦前的な形で簡単に想定できないように思う。その場合に、一つの戦前の、それから戦後の型が崩壊したとすると、島崎さんのおっしゃる「型の崩壊」という意味での農村の解体に代わって、新しい日本資本主義の戦後の型というものが考えられるような気がするが、そういうものをどう、……

(島崎) それに代わる展望の問題か。

(高橋) 展望の問題である。例えば、資本主義がどのような農村を再構成していくのか、それと同時にそれに対してどのような農村を考えていくのか。ちょうど農地改革の時に、さきほど似田貝君が言ったように、あるとすればその時期に構想できた。上からはどういふ型を想定し、下からはどういふものが考えられるのか、というような点はあまり議論されていないのか。

(島崎) 農村としてか。それはやるのなら社会学がやらなければならぬ。

(高橋) 資本主義の一番根本的な再生産構造との関連では、どういふふうに考えられているのかというより、こと。

(島崎) 今、冗談ではなくて言ったつもりであるが、やはりそこに問題が今、集中していると思う。で、それをみんながわからなから引き回して、答がなかなか出なくて停滞していると思う。

(高橋) しかし、どういふ型を構築するかという問題は、まず土地国有化論はともかくあるとしても、その割には議論されていない。農業をどのようなものとして考えるのか、というようにすることについてもその割には考えられていなくて、それはちょうど農地改革の時に、農地改革の限界はいろいろ言われたけれども、それから後どうするかという問題は考えられなかった。

(島崎) 今、ここまで高度独占の段階に入っていて、そこでの農村農業の矛盾がこういう形で顕在化してきた場合に、当然その「型の崩壊」が指摘されてくるとすれば、それに代わる型が、この高度独占の段階の中で再構築されるとは、僕は思わない。その再構築は、やはり「型の再編」という形では出てこないのではないかと思う。

(蓮見) そうすると、それは上からもか。

(島崎) 上から出てくるなら危機は問題にならないのではないか、その可能性があるのなら。農業について言えばインテグレーションなり、システム農業なり、いろいろな問題が試みられてきて、それが一つの展望というものをもっているのなら、やはり農業の危機、あるいは農業の危機的状況ということ、それほど考えなくても済むと思う。ただ疑問としてさきほどから言っていたわけで、インテグレーションというような問題は非常に大きな問題であるし、日本以外の独占国家の下で、方々でインテグレーションというのは行なわれて、かなりの広がりをもっているだろうと思うが、それが今後どういふ形で日本の場合に進展してくるかは、一遍に、一概にこれ

はだめなんだというところでもないだろう。

(高橋) そうすると、仮りに下の方からでも展望はないというところか。

(島崎) 下からの展望がないと困るのではないか。

(高橋) いや、しかし今の型というか、どういふものを構想するかということであるが、これだけ高度の独占資本主義が支配している場合、展望がもてないというようになるかと、要するに独占資本主義がなくなれば、特に現在の状況がなくなれば、どうにもならないと言うようなベシミズムが出てくるような気がする。

(島崎) 理論家はそうである。ベシミズムになるのだろうけれども、やはり似田貝君がさきほど最後に言ったように、労働者・農民の立場から、運動として展開されてくることまでを規定しているわけではなくて、それは一応我々としては、理論化が理論的に提示しなければいけないのではないか。そういう農民運動の現状からそれがあるかないかということになると、やはり評価は非常に悲観的であるが、「ない」としてしまふのでは、これはどうにもならない。それで、さきほど引用で最後に一言付け加えておこうと思つて残しておいた点であるが、レーニンの「カール・マルクス」の論文の中で、こういう言い方をしている。「資本主義は工業と農業との連絡を決定的に切り離す。しかし同時にその発展の頂上において、その連絡の回復のための科学の意識的応用と集団労働の組合せとを基礎とする工業と農業との結合のための人類の新しい定住の仕方、(農村の荒廃、野蠻化、ならびに大都市における膨大な大衆の不自然な密集の廃棄を伴う) 定住の仕方のための新しい諸要素を準備する。」

と言っている。つまり資本主義の発展の頂上において、新しい定住の仕方のための新しい諸要素を準備するということを言っているわけである。その辺、資本主義の枠内で、どういふことが農業と工業、あるいは都市と農村との差異の止揚に役立ち得るか、あるいはその限界はどこにあるか。まあそういう国独資の工業化した段階で最高の、発展の頂上というのはそういうこととしていいと思うが、そういう国独資の工業化した段階においてなし得る範囲内の物質的な基礎、ということもかわらず実現し得ない資本主義の限界といったようなものを我々はやはりつかまえておく必要があるだろうと思う。

(似田貝) 僕の今日の報告は、逆に言えばそこから出発して、都市と農村の対立を、逆に変貌における都市と農村とを「分業」というふうに考えていくと、いくつかやはり条件をあげる必要があると思ふ。で、僕の場合には、明らかに問題というのは土地問題で、これはもう現段階では明らかに問題だと思ふ。もう一つやはり、例えばさっきは抽象的に「地域開発」という言い方をしたが、そういうふうな何かむしろ、レーニンが言うみたいに、資本主義の高度の成長の中で、かえつてある意味では変革に向けての都市と農村との対立を止揚していく、その例えば具体的な内容というか、そういうものを島崎先生の場合にはどういふふうにお考えになるか。

(島崎) やはり資本主義の枠内で、物質的な基礎としては、準備されてくるだろうと思ふ。

(似田貝) それは僕もそうだろうと思ふが、……

(高橋) 私がさきほど似田貝さんに質問したのは、そういう問題を言っていたわけである。島崎さんの今おっしゃった例、そういう

ことを踏まえて、これからの定住様式みたいなものを構想していく必要もある。つまり、純農村という、農業を基体としての性格は失われてきているが。

(島崎) ただ、社会主義というのはやはり過渡期であるから、つまり社会主義の段階で、それが達成されるとは考えられない。

(高橋) 達成されるということではなくて、資本主義社会の中で、いろいろな現実の問題は出てくるわけである。それをどういうように克服していくか、そういう方向性みたいなものは考えられていない。であるから、ある意味では、この農村生活をどうしていくかという場合には、自治体論みたいなものにもまで広がっていかなければならぬということになってくる。現実には世の中の動きがそういうところをめぐって争われているようなところはある。

(島崎) だから格差の拡大として進化するといったその格差、もちろん格差の面で、こういう資本主義段階の中で埋められる面というのはぜひいふんあると思う。ただ「本質的差異の止揚」という場合に、その「本質的差異」というのは所有形態の問題であるから、所有形態が社会主義になって、一気に工業における全人民的所有のよいうな形で農業における所有が達成されるわけではなく、やはり集団的所有の段階を通らなければならぬ。そこに、まだ問題は残ってくる。で、当面差額収益という問題が当然起こってくるわけである。その場合、内部の矛盾が当然あるし、自然力を克服するだけの歴大な生産力が、工業によって、農業の援助が、組織的に、大量に行なわれなければだめなのではないか。

(高橋) 本質的にはそうであるが、やはりそれがどういう具合に展開されていくかという過程が重要で、そ

は、恐らく状況ができて自然発生的に事態はつくりあげられない、ということはあると思う。

(戎野) 私自身わからないので困っているが、いわゆる型の問題に関連するが、昭和三〇年代から第二階梯という形で展開してきて、農産物も含めた商品の貿易の自由化、資本の自由化という段階にたつてきて、農村にとっては非常に決定的な意味の違いをもってきているのではないだろうか。さきほど国際分業のお話があって、それが波状をしていると、確かに大きな問題をかかえてきて「波状」という言葉も適切な感じがするが、いわゆる資本の国際的な流動化という、国際資本の動きなどをみて、それからまた一面においては、日本もその中に完全に巻き込まれていっていると、そのレベルになると、ちょっと言葉が悪いが、日本の農業が安い農産物と安い労働力を提供しなければ、どこからでもいくらでももってくる、お前達の農村はもう放棄だと宣言される何か感じがするわけである。そこにおいて、農村にとっての大きな変革がある。その辺が決定的な段階を経ているのではないか。

(島崎) その辺の時期区分というのと、やはり農基法が行なわれたにもかかわらず構造農政が実があらないと、そういうところで、かなり財界から農産物の自由化に対する圧力がいろいろな形で声明が出てくる、あの時期だと思ふ。

(戎野) あの後と前をどういうふうに理解していくかということだろうと思ふ。

(島崎) それであそこで四〇年不況時とぶつかる。それがやはりもう一つのテイク・オフであろう。

(蓮見) では、どなたか特に御発言なさりたい方はないか、特に

左ければ一応研究会はこれにて終らせていかなく。